

第181図 41-OG出土埴輪 2 (1/4)

現から2×2間の建物を表現したものと考えられる。

鳥形埴輪（第182図，図版134）

703～709は，鳥を形どった埴輪片と思われる。703は頸部，704は肩から胴部，705・706・708は，羽および胴部にかけての形象表現であると思われる。707は，鳥の尾であると思われる，709は羽の先端を表したものである。胴部，羽部ともナデまたはハケによって調整し羽は線刻によって表現している。他の古墳の類例から水鳥を表現したものとされるが，胎土・形態などから703～707，708，709の3個体以上の存在を推定できる。

不明形象埴輪（第182図，図版134）

710～712は，破片が少なく何を表現した形象埴輪であるのか不明である。ただ，形状をみると710は湾曲し，711は直線的である。縁の微妙な湾曲と複数の突起から，考えられるものは船の舷側板とピボットである。ただしその場合，表面のヘラ描き文様と710の円形通孔が，管見による船形埴輪の類例にないので断定は差し控えたい。

朝顔形埴輪（第183・184図，図版135）

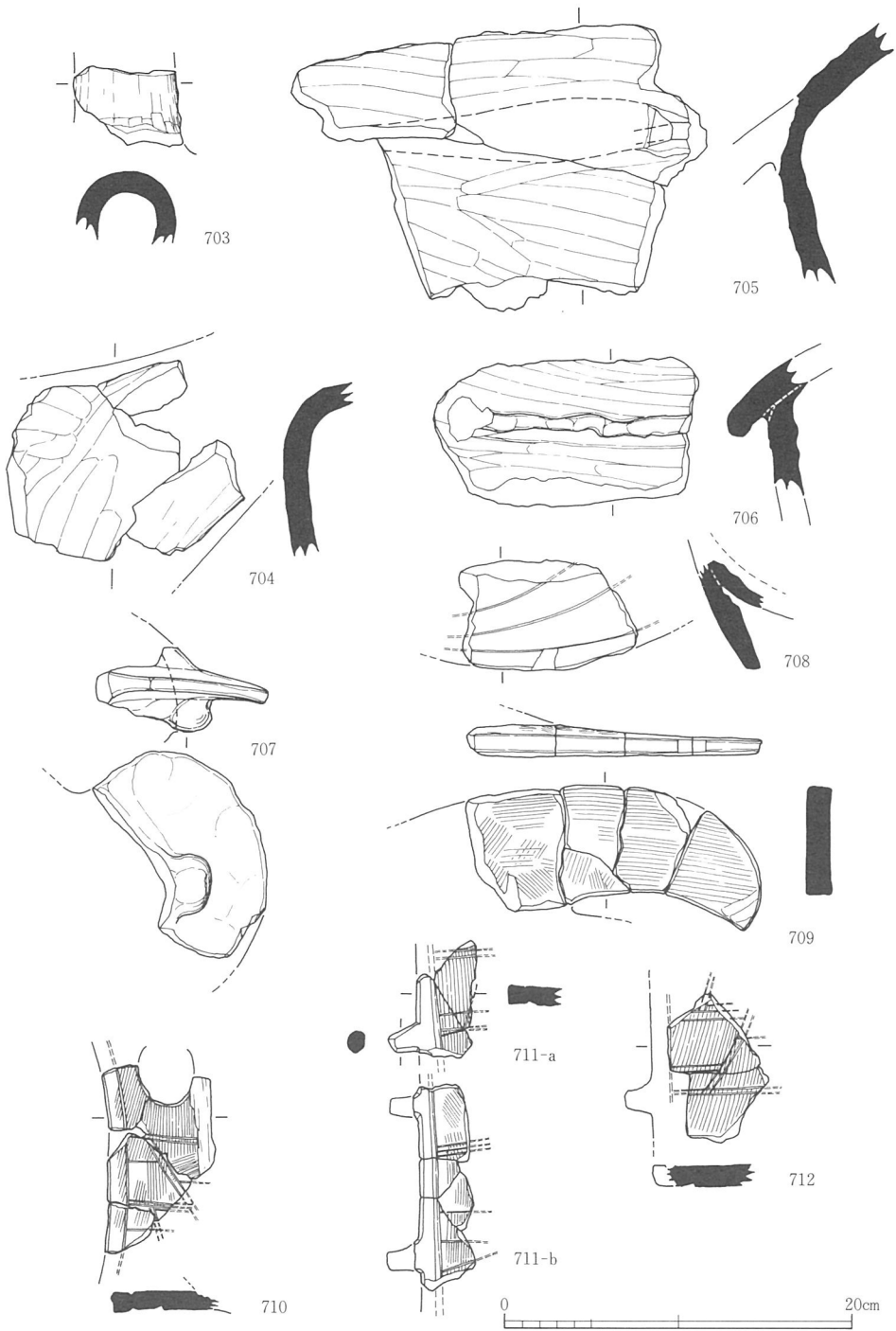
713～719は，朝顔形埴輪である。口縁部と体部が接合するものは，713だけであり，714は，口縁部と体部が接合しないが，胎土，焼成からみて同一個体であると考えられる。焼成は，714・715～717・719が土師質で，713・718が須恵質である。朝顔部は外面には放射状に，内面には口縁部に沿うように数回に分けてハケをほどこしている。外面には一条のタガをめぐる。体部外面の調整は，713・714がヨコハケB類であり，716はタテハケが残り，のちヨコハケC類で調整を行なっている。体部内面は3点とも全てナデである。また，体部上から二段目には円形の一对の透かしがあげられている。

円筒埴輪（第185～191図，図版136～143）

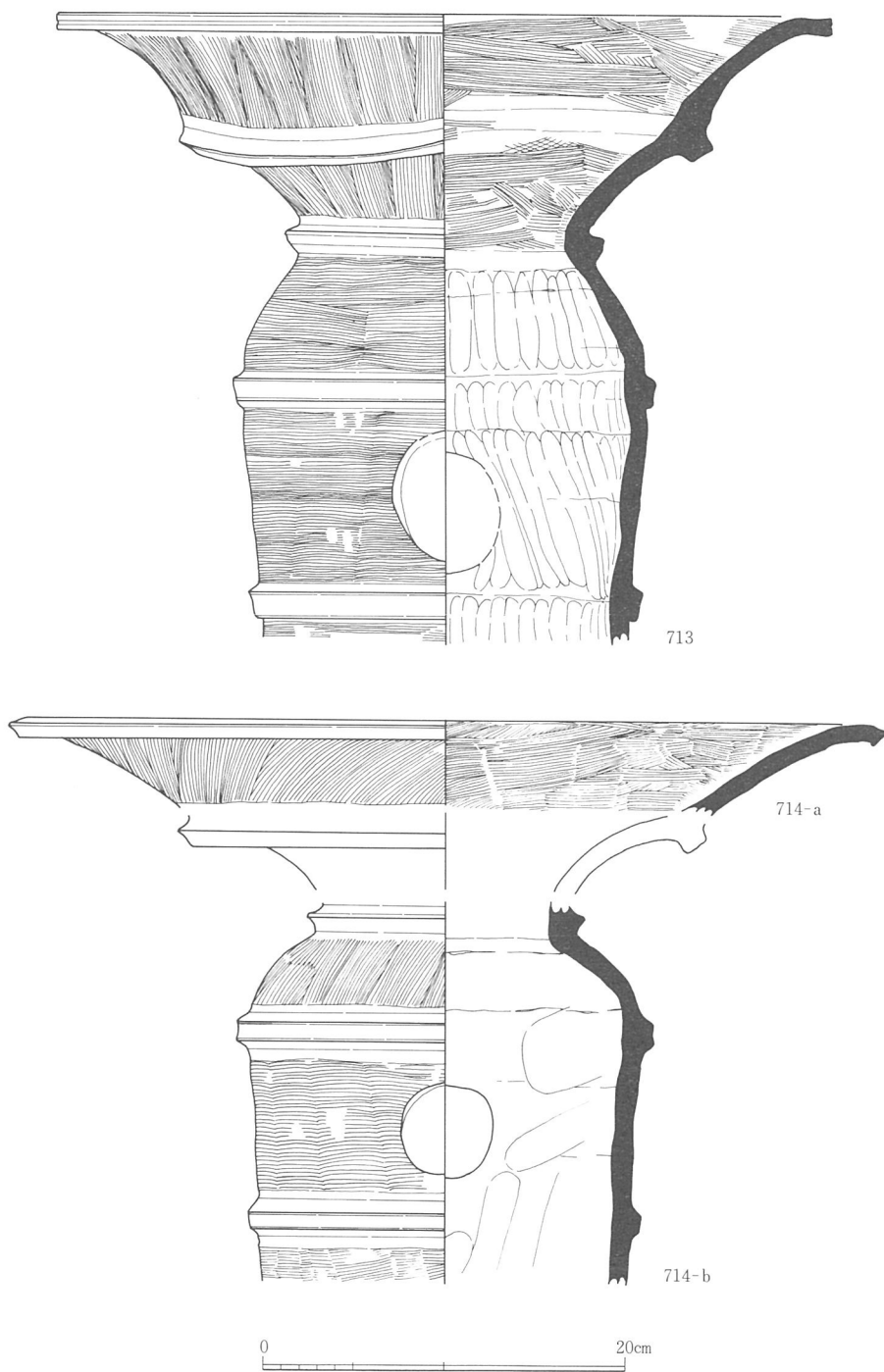
720～724は，焼成土師質でヨコハケA類のものであり，口径には大小ある。口縁部はほぼ直立し，端部は明確な面をもち内傾するものもある。外面は一次調整のタテハケが部分的に残るものもある。内面はタテ・ナナメハケのちにナデが上半部にみられるもの（720・722），ナデのもの（721・723・724）がみられる。

725～736は，焼成土師質でヨコハケB類のものであり，口径には大小ある。口縁部はほぼ直立し，端部は平坦な面をなし，水平なもの，内傾するもの，外傾するものがある。外面のヨコハケの止め方は垂直に静止するものと斜めに静止するものがある。中には，ヨコハケを一段目だけに施し二段目には施さないものがある（736）。729の様にハケを一周させた後上方へ流していくものもある。さらに，ヨコハケが所々器壁にあたっていないとこ

第3節 遺構と遺物

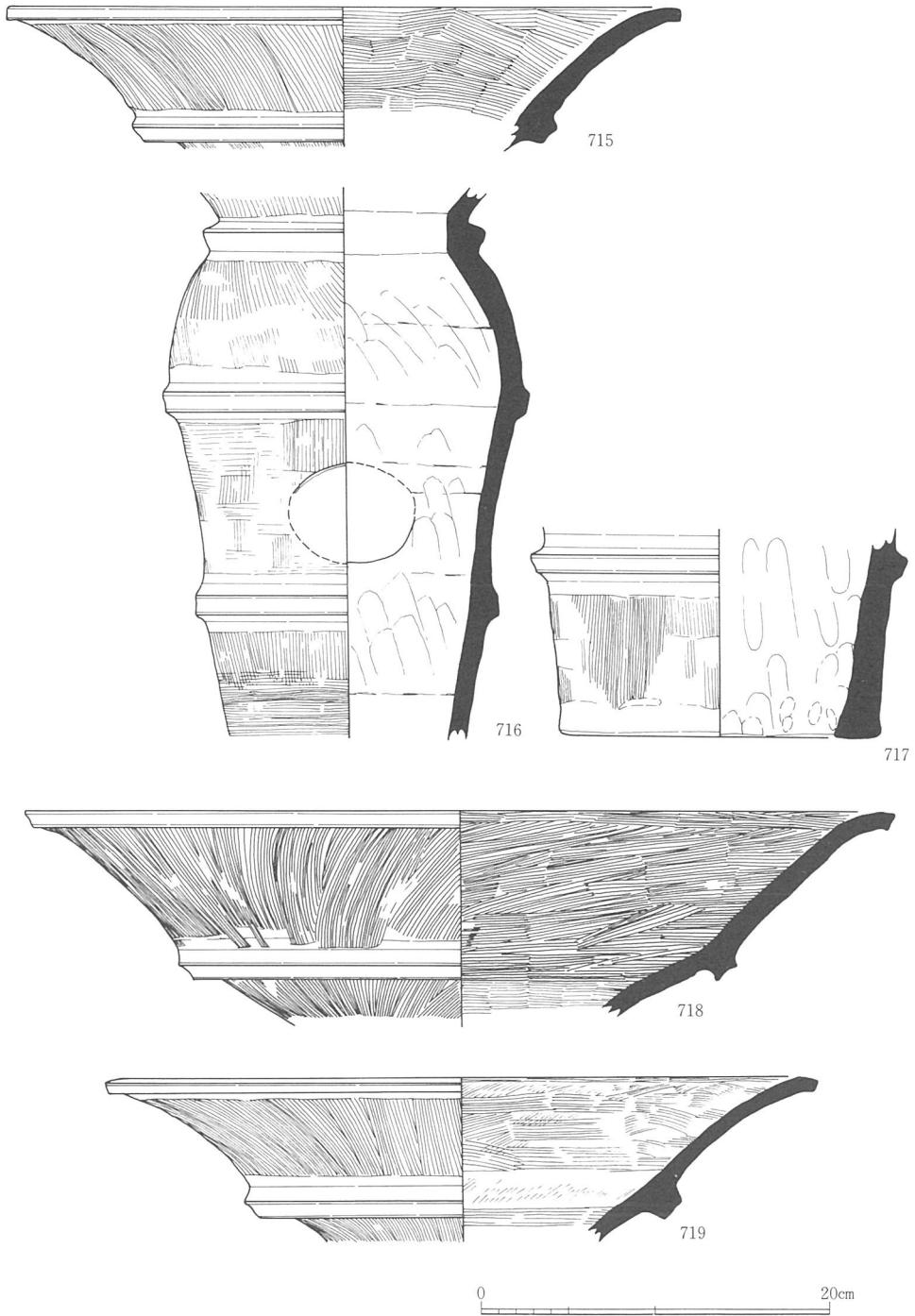


第182図 41-O G 出土埴輪 3 (1/4)

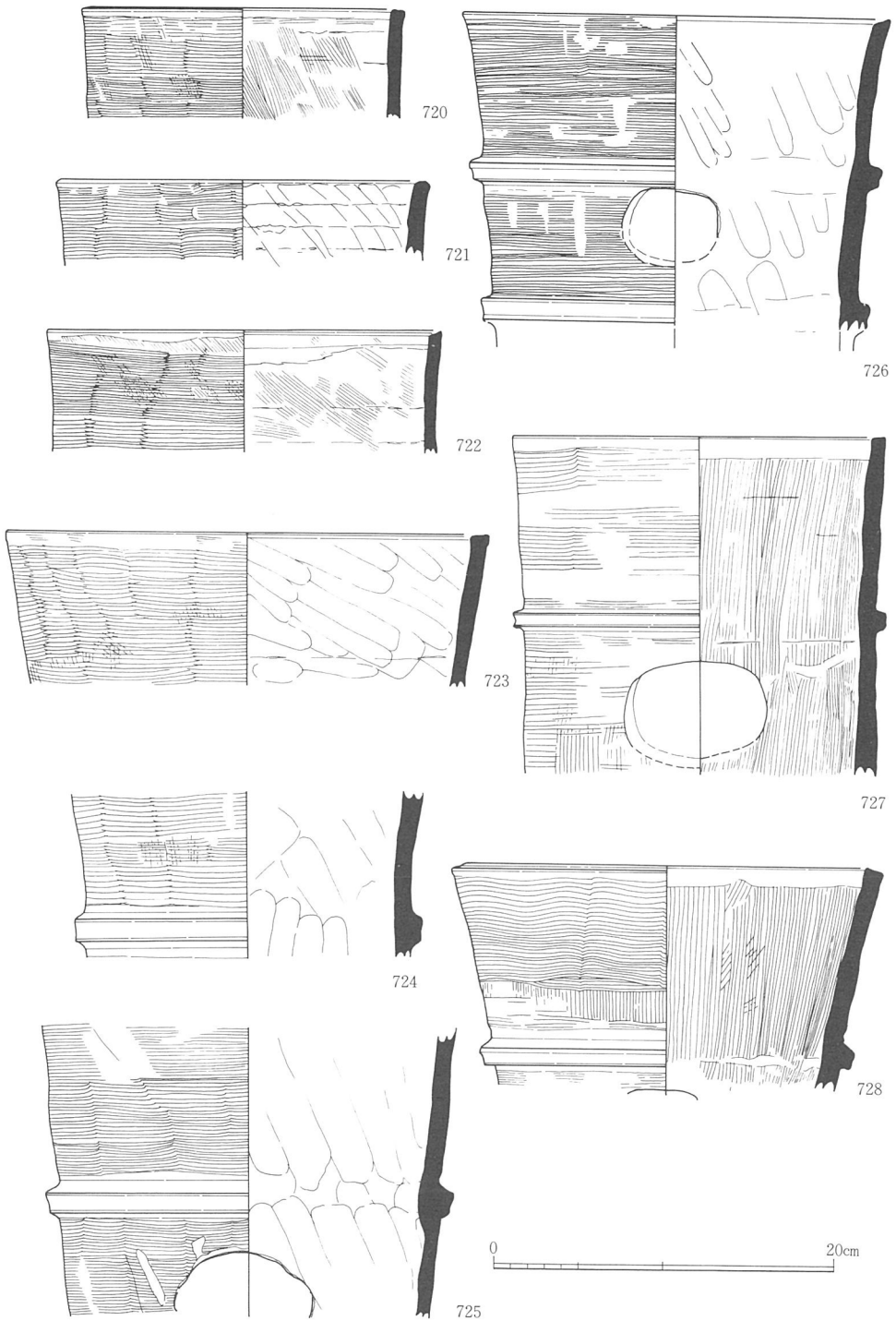


第183図 41-OG 出土埴輪 4 (1/4)

第3節 遺構と遺物

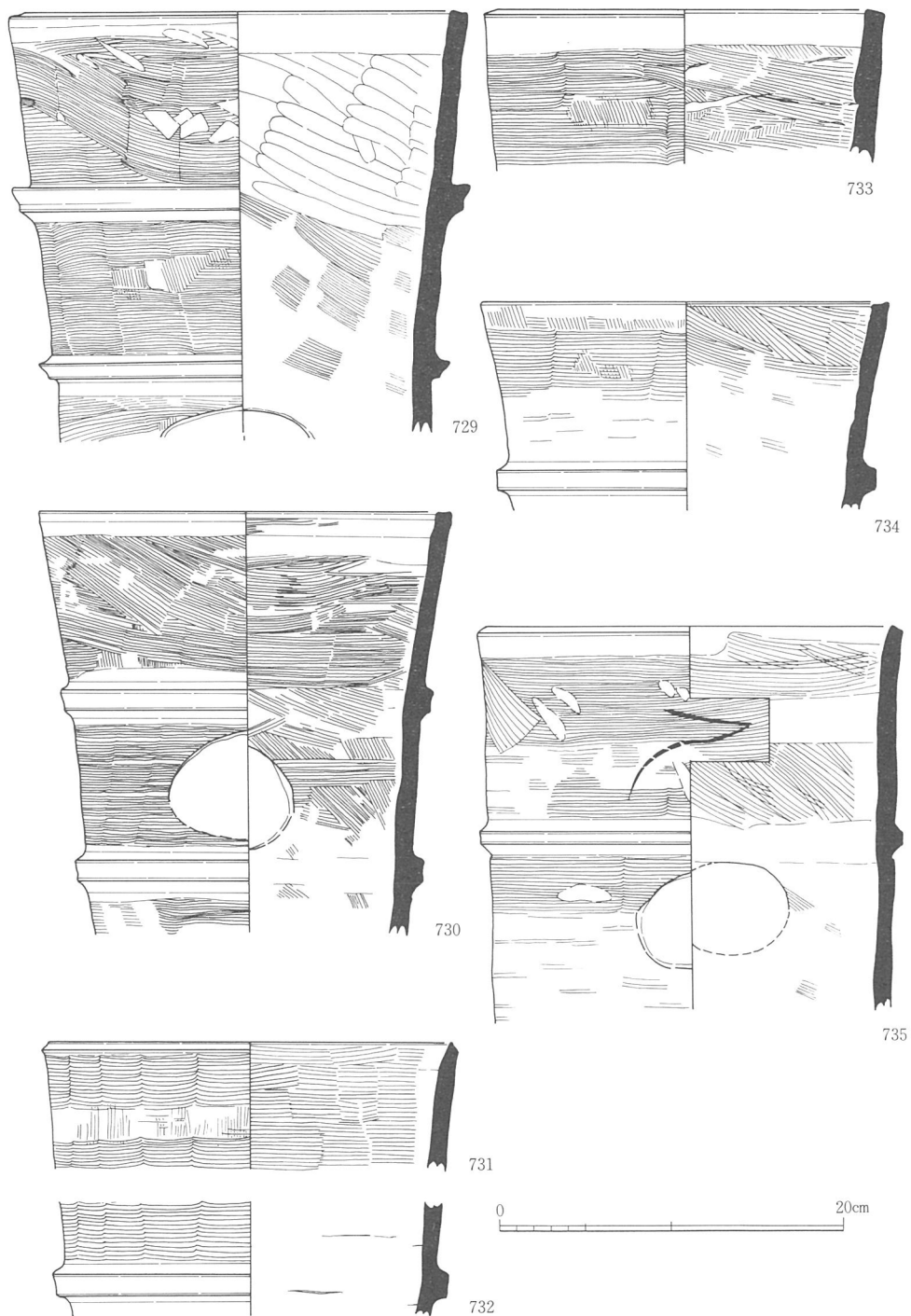


第184図 41-O G出土埴輪5 (1/4)

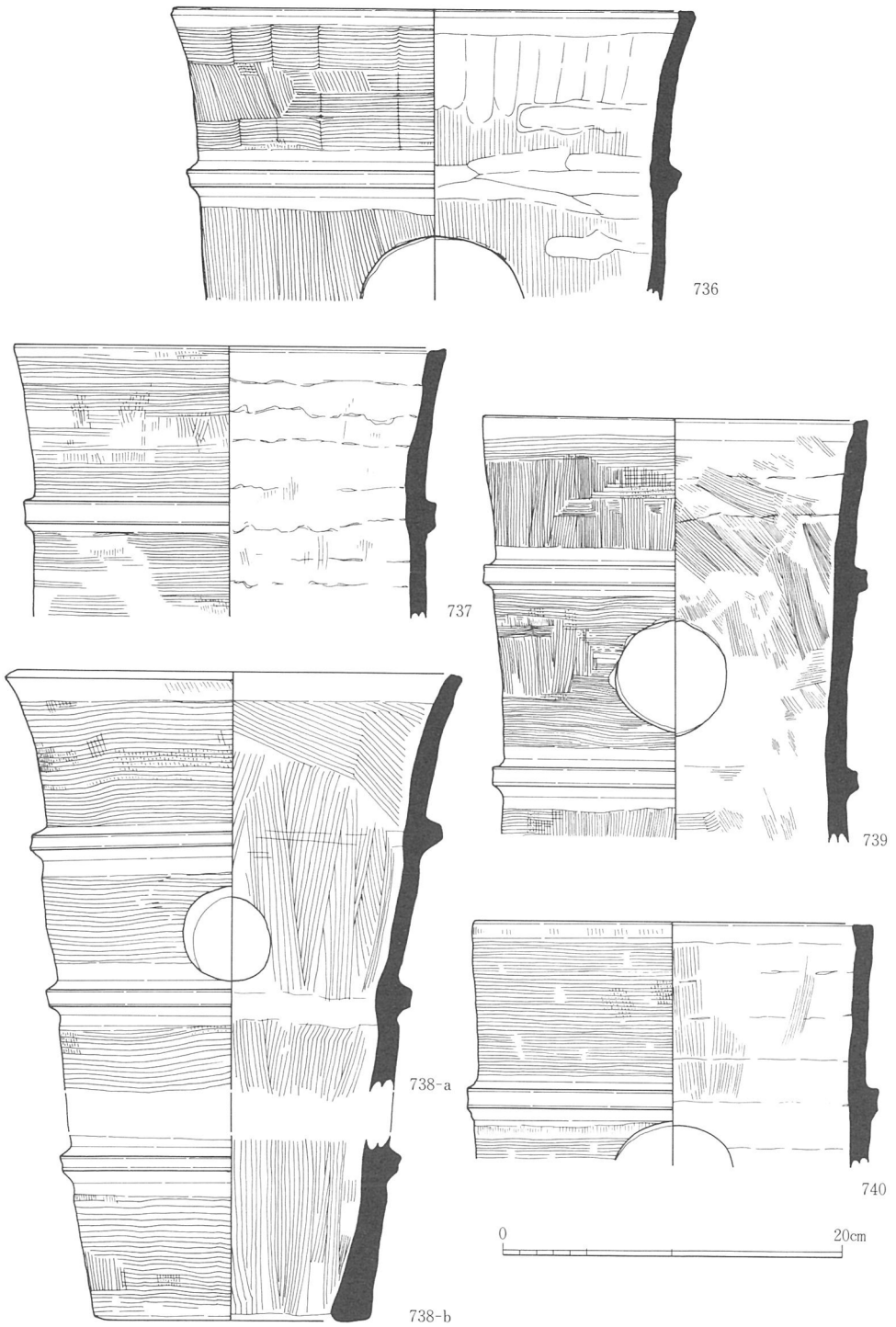


第185図 41-O G 出土埴輪 6 (1/4)

第3節 遺構と遺物

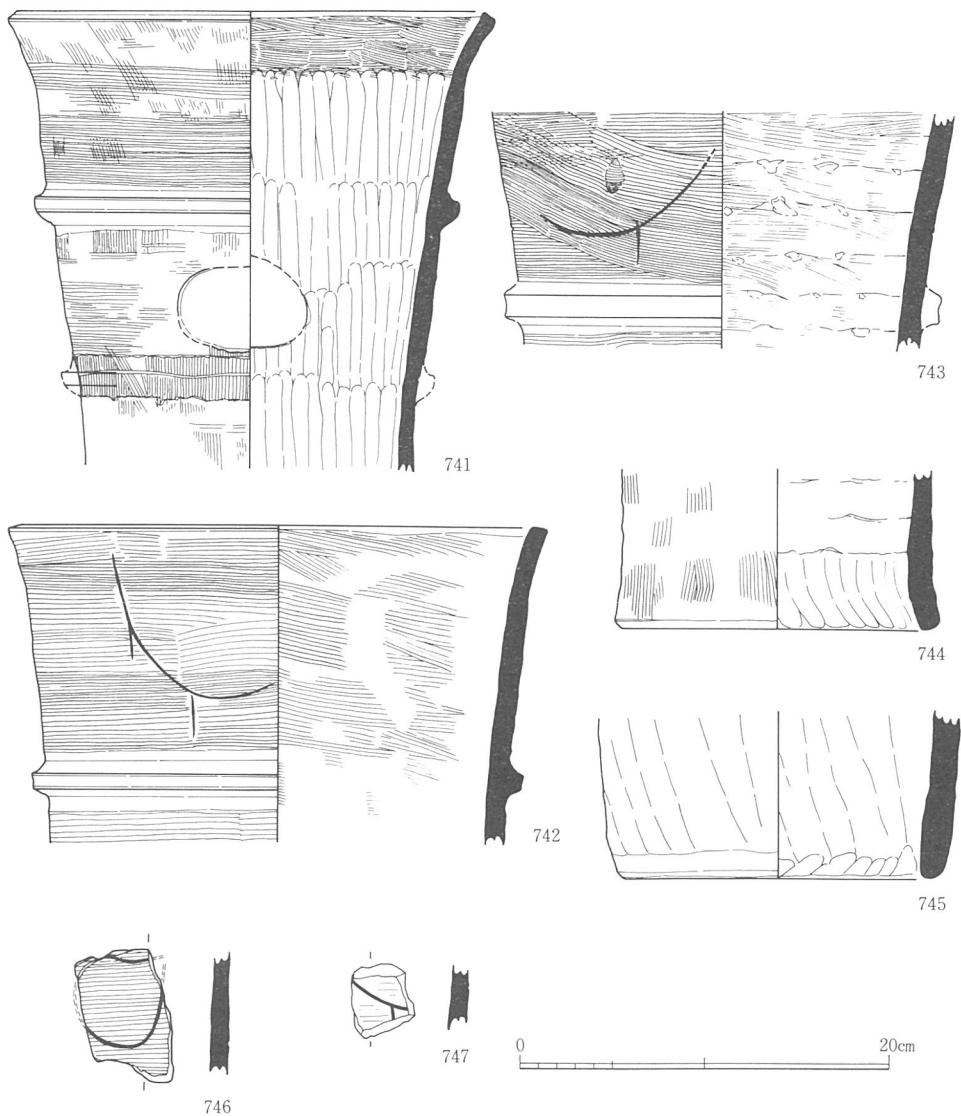


第186図 41-O G 出土埴輪 7 (1/4)



第187図 41-OG出土埴輪8 (1/4)

第3節 遺構と遺物



第188図 41-OG出土埴輪9 (1/4)

ろがあり、その部分にはタテハケが残る。735には線刻がみられる。これらの内面はタテハケ、ヨコハケ、ナナメハケ、タテハケのちヨコハケ、ナナメハケのちタテハケ、ナナメハケのちヨコハケ、タテハケのちナデ、ナナメハケのちナデの各種の調整がみられる。透かしは上から二段目にあけるものと三段目にあけるもの（729）がある。透かしの形は円形のもの和不整円形のもの（725）がみられる。

737~743は、焼成土師質でヨコハケC類のものである。737と740は同一個体であると思

われる。口径には大小ある。口縁部はほぼ直立し、端部は平坦面をなす。外面は、739のようにヨコハケが部分的にしか器壁にあたらずタテハケがかなり残るものや、743のようにハケを下の方へ流すものがある。741では二段目のタガの位置（タガは剝離）に横線がみられ、あらかじめ突帯を貼付ける位置を示していたものと考えられる。また、タガの位置にはタテハケが残っているので、タテハケのちタガを貼り付け、ヨコハケで仕上げる工程が看取される。738は最下段にもヨコハケを施す。内面は、ヨコハケ、タテハケのちナメハケ、タテハケのちナデの各種がみられる。また、741のように口縁部付近のみハケを施すものもある。また、742・743の外面には線刻がみられるものもある。透かしは二段目にあけられ、円形である。

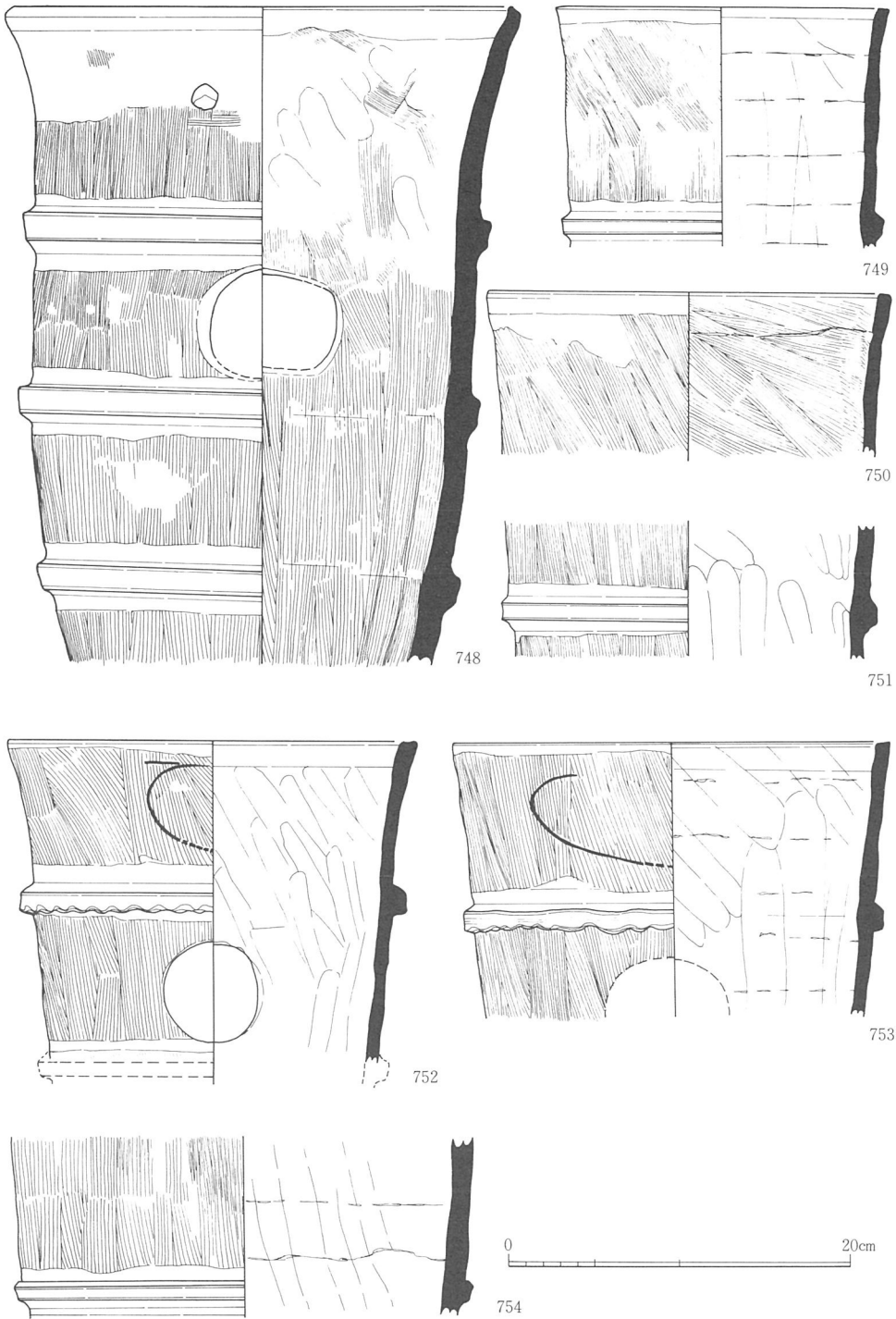
744・745は底部である。744には外面にタテハケ、内面ナデ及び未調整。745は内外面ともナデ。基部付近は2個体とも並列したナデを繰り返す。

746・747は線刻の一部がみられる例である。747は742・743と同じ記号を表現したものである。

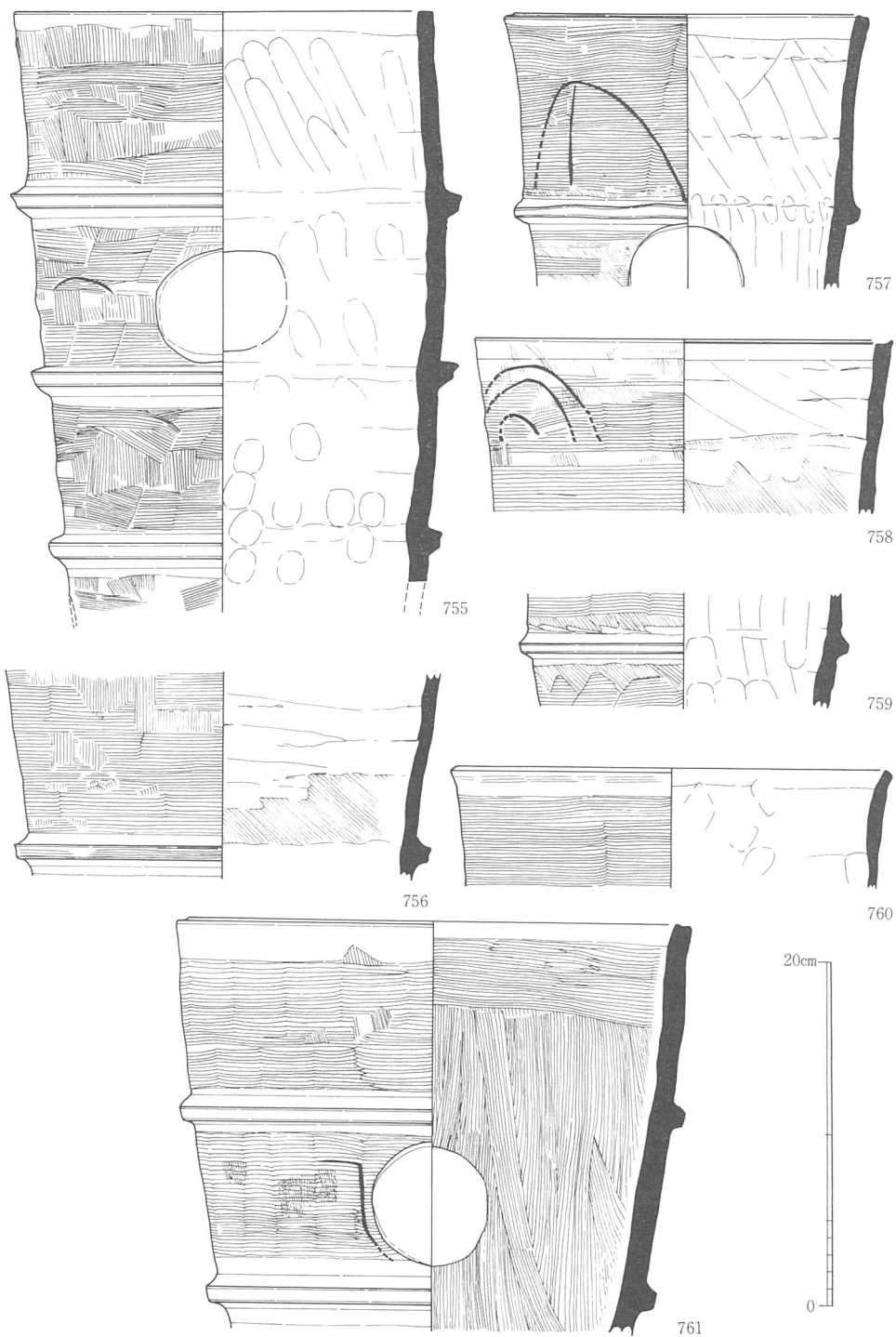
748～754は、焼成土師質で、外面タテハケのものである。750と751は同一個体と思われる。口径には大小ある。口縁部はほぼ直立し、端部は平坦な面をなすが、748は外反したのち端部付近が小さく内湾し、端面をつくらない。また、748は、二段目の中央部を境に異なる工具を使用し、上部が細かいハケ、下部が粗いハケとなっている。これは内面についても同様であるが、細かいハケの部分はナデ消している。さらに、一段目中央付近には一箇所の円形の小穿孔（透かしではない）がみられる。また、この埴輪のタガは他のものに比べて太い。752・753はタガの下面に波状の連続刻みを施している。また、この2個体には良く似た線刻がみられる。750の内面は、ナメハケ、748内面はタテハケのちナデ、他はナデである。いずれも透かしは二段目に円形のものがあけられる。

755～765は、須恵質で調整はヨコハケB類のみである。762と763、764と765は同一個体と思われる。焼成については、755～761は須恵質でも焼成があまく、土師質に近いものであり、762～765は硬質で須恵器そのものの焼きである。口径は大小ある。口縁部はほぼ直立し、端部は平坦な面をなすが、762の端部は、外側へ外反する。また、この埴輪（762）は全体に激しく歪んでいる。外面は、ヨコハケがあたらないうちに一次調整のタテハケが残る。763の最下段は一次調整のタテハケのみで、二次調整のヨコハケは施さない。また、755・757・758・761には線刻がみられる。内面は、タテハケ、タテハケのちヨコハケ、ヨコハケのちナメハケ、ナメハケのちヨコハケ、ナメハケのちナデ、そしてナデの

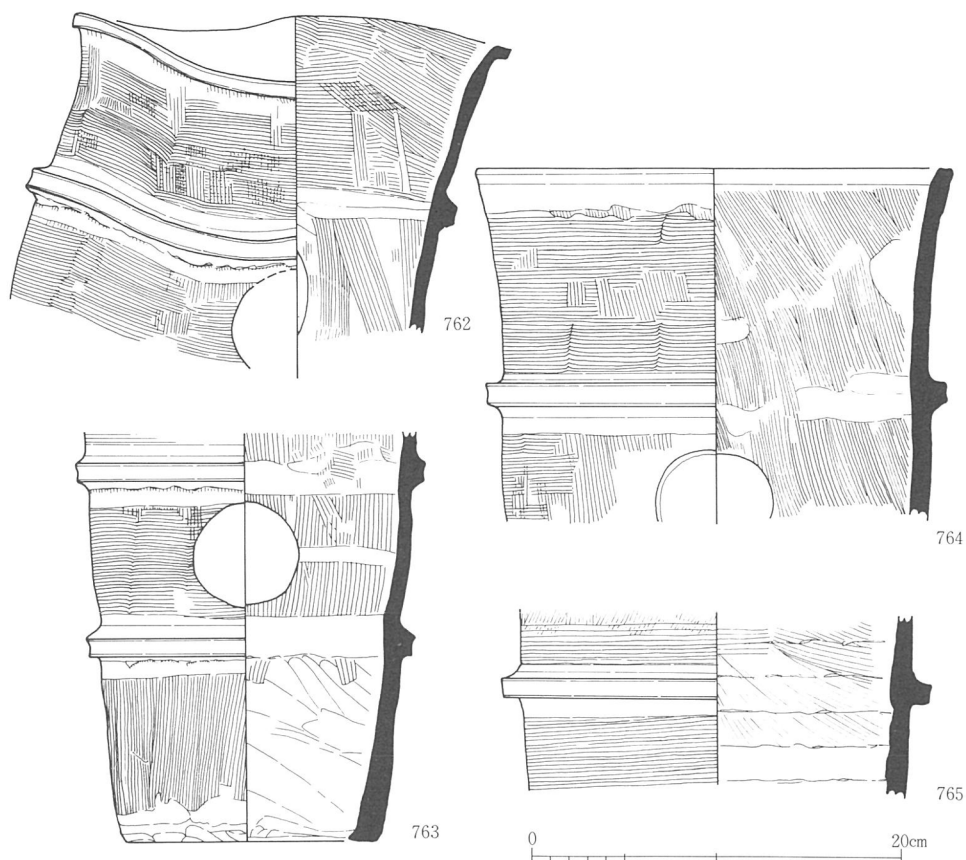
第3節 遺構と遺物



第189図 41-O G 出土埴輪10 (1/4)



第190図 41-O G出土埴輪11(1/4)



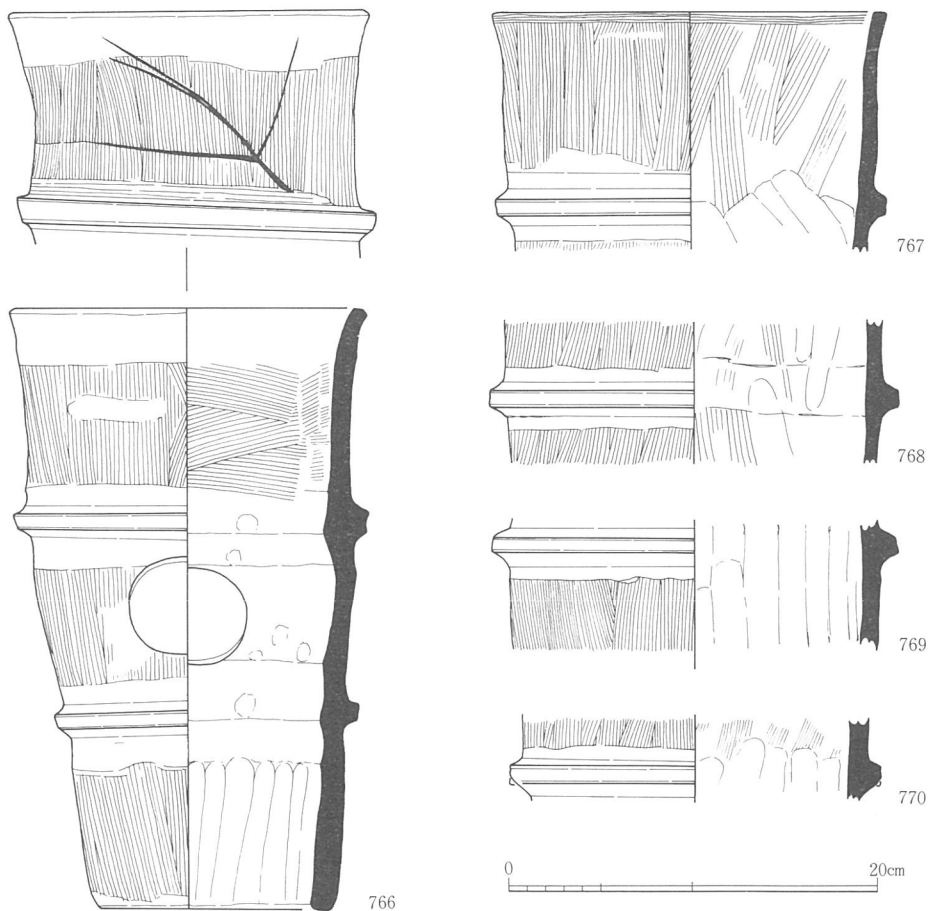
第191図 41-O G出土埴輪12 (1/4)

ものがみられる。また、761のように口縁部付近をヨコハケ、以下をタテハケで明瞭に分けて調整しているものがある。透かしは円形が通有で上から二段目にあるが、755のように四段以上あるものは四段目にも90°方向を違えてあけられている。

689-O G (第192~194図, 図版68・144)

689-O Gは41-O Gの北西、C09K A付近に位置しており一辺5~6m(周溝肩を含むと8.5m)の方墳である。この古墳も埋没谷上に立地する。周溝の幅は北東、北西、南西各辺は1mであるが、南東辺が1.5mであり、この辺のみ中央付近が深くなっている。この古墳も41-O Gと同じく中世以降の開墾によって墳丘の盛土が全て削平され、周溝のみが残存している。また、当然主体部も削平を受けて残存しなかった。遺物は墳丘上から転落した状態で、周溝南東辺中央部の深いところから集中して埴輪、須恵器片が出土した。

第3節 遺構と遺物



第194図 689-O G 出土埴輪 (1/4)

埴輪 (第194図, 図版68・144)

689-O Gの埴輪は、円筒埴輪片は2個体分出土している。一点はほぼ完形に復元されるような状況であり、本来墳丘に立っていた埴輪は古墳の規模とも関連して少なかったと考えたい。

766は完形復元され、タガは三段である。口径18.6cmで器高32.8cmを測る。焼成は土師質で、調整は三段ともにタテハケであるが、口縁部にはヨコハケ（ハケ工具を使っているがナデ調整ともいえる）がみられる。内面は上段部はヨコハケが施され、口縁部内面は外面と同じヨコハケが施される。中・下段はナデ調整による。口縁部は直立し、端部はわずかに外反し平坦な面を作る。底部は、内面に並列のナデがみられる。また、外面上段には線刻がみられる。二段目には円形の透かしが二方向にあけられている。

767～770は、胎土・調整から同一個体と思われる（実測図は同じ段の部分を描いている可能性がある）。口径は21.7cm、焼成は土師質で外面タテハケである。内面は斜め方向のハケであるが、下半はナデであろう。

40-O G（第195～197図，図版69・144～146）

40-O Gは、C10UD付近に位置する一辺10m（周溝肩を含むと13.5m）の方墳である。この古墳も先の2基の古墳と同様、中世以降の開墾によって墳丘の盛土が削平され、周溝のみが残存している。また、主体部も削平され残存しない。この古墳はやや高い位置に立地するため削平が激しく、周溝が非常に浅くなっている。さらに、周溝は南辺が中世の土坑（47-O O）により一部破壊されている。西側周溝は、近世以降の溝によって消滅している。周溝の現況は、北東角・南東角が浅く細くなっている。遺物はすべて周溝内から検出した。

須恵器（第196図，図版144・145）

杯蓋（771・772）は2点あり、771にはつまみがついていた痕跡が認められ、高杯の蓋であろう。ヘラケズリは天井部ほぼ全面に及ぶ。

高杯（773・774・776）は3点ある。773・774は有蓋高杯で脚部はいずれも欠損しており、杯部のみが残る。776は小破片であるが、無蓋高杯の口縁部であろう。

把手付碗（775）は、体部ほぼ中央に細身の把手がついており、同じ位置に波状文をめぐらす。底部は手持ちヘラケズリである。

器台（777～779）は、通有の器台（777・778）と筒形器台（779）がある。777と778は、受部と脚部であるが、別個体かと思われる。受部（777）は口縁部付近に二条、体部中央に一条の突帯を、またその間に三条の波状文をめぐらす。それらは互いに重なり合っている箇所がある。体部には整形時のタタキの痕跡が残る。脚部（778）は下から二段分が残存する。各段の境には二条の突帯をめぐらし、その間には四条の波状文と、三角形と長方形の透かしが交互にあわせて七方向にあけられる。筒形器台（779）は、筒部の上から三段分が残存している。各段とも長方形の透かしが六方向にあけられるが、最上段の肩部は、ひとつが省略されて五方向となっている。二段目以下は、三～四条の波状文をめぐらす。各段の境には二条の突帯をめぐらす。

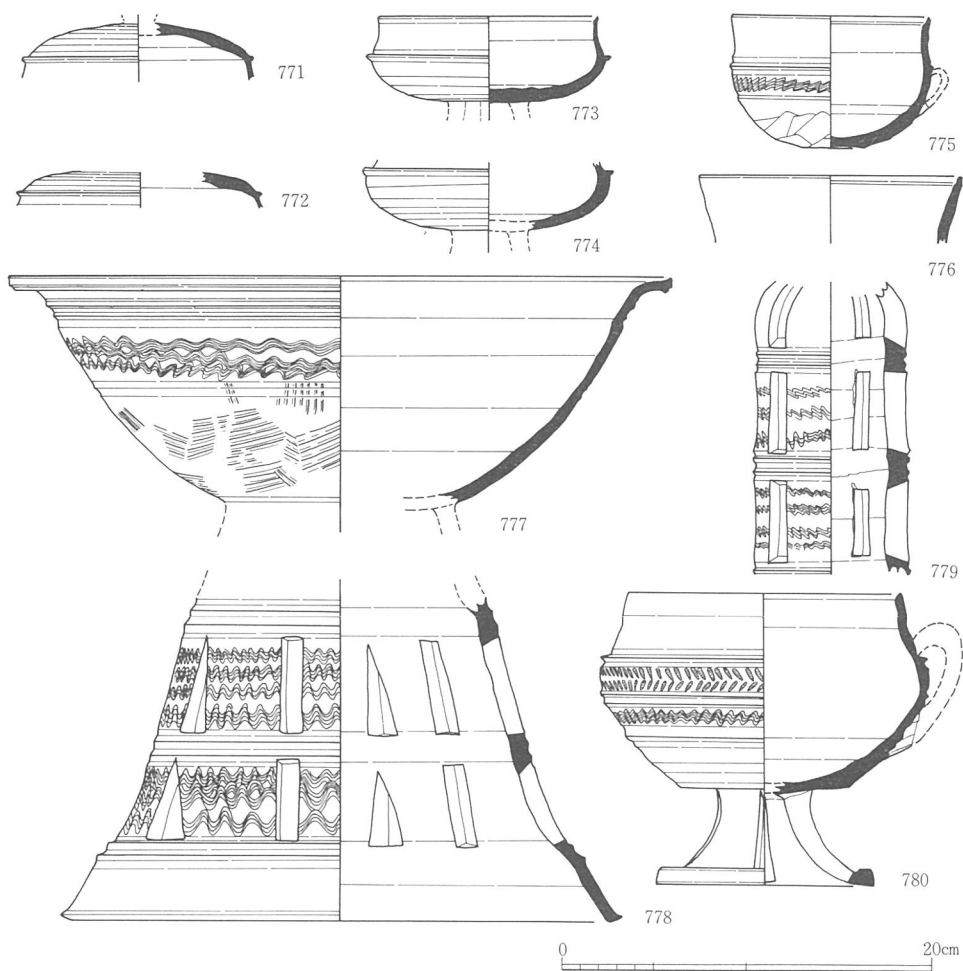
把手付脚付碗（780）は、体部に上下二列の刺突文、その下に一条の波状文をめぐらすもので底部は平坦、脚部には四方向に長方形の透かしがあげられる。

いずれの須恵器も、造りは丁寧である。

第3節 遺構と遺物



第195図 40-OG平面・断面図 (1/160, 1/80)



第196図 40-O G出土遺物 (1/4)

埴輪 (第197図, 図版146)

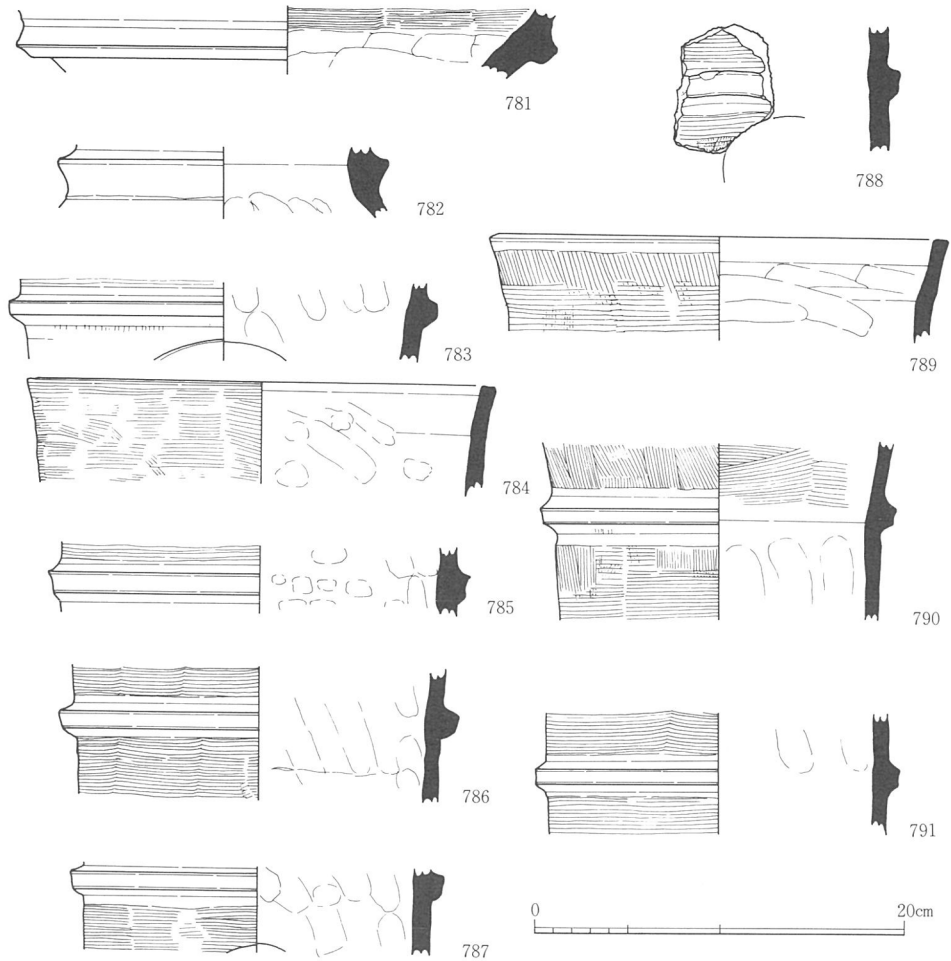
朝顔形埴輪

781~783は、朝顔形埴輪である。781は口縁部であり、外面調整は不明ながら内面の調整はヨコハケ、タガの裏側はナデである。782は頸部で、断面三角形のタガを貼り付ける。783は胎土、焼成より782と同一個体の可能性が高い。タガの下には一次調整と考えられるタテハケがみられ、円形透かしの一部もみられる。

円筒埴輪

784~791は、円筒埴輪である。784・785, 786・787は各々同一個体であると思われる。焼成は784・785・789・791が土師質, 786・787・790が須恵質(焼成は土師質に近いもの)

第3節 遺構と遺物

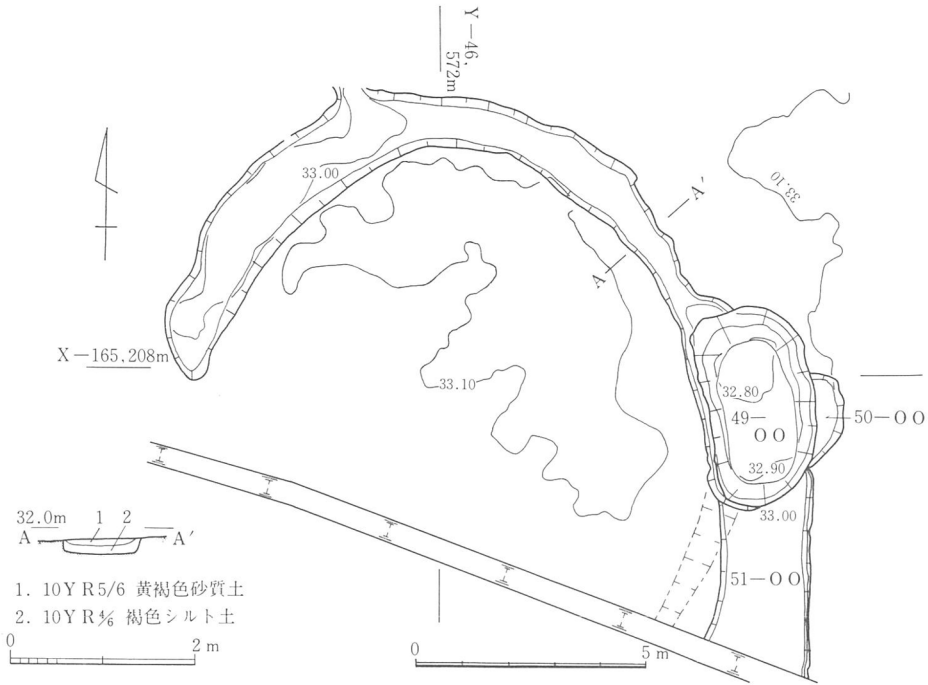


第197図 40-O G出土埴輪 (1/4)

である。調整は破片が小さく摩滅したものもあり判断しにくいだが、識別できるものについてみると、土師質のものでは、791がヨコハケB類、789がヨコハケC類であろう。須恵質のものでは786がヨコハケB類である。789～791は一次調整のタテハケが残っている。内面については790にヨコハケがみられるがその他はナデである。この円筒埴輪群は、内面口縁付近でもナデ調整で、ハケを施さない個体がある(784・789)。

39-O G (第198～200図, 図版69・146)

39-O Gは、C15BH付近に位置する直径10m(周溝肩を入れると12m)の円墳である。南側半分は調査区外となっているため今回は調査を行うことができなかった。平面的には検出できなかったが(平面図では破線)、調査区南端側溝の断面観察によると古墳周溝の



第198図 39-O G平面・断面図 (1/160, 1/80)

埋土と良く似た溝状のものが観察された。それが古墳周溝だとすると、周溝はさらに内側へ折れ込むため、方墳となる可能性もある。この古墳も墳丘、主体部は削平されており、周溝のみが残っている。40-O Gと同様、高い位置に築かれているため後世の削平が激しく周溝は非常に浅い。さらに周溝東側が中世の土坑(49-O O)により破壊されている。また、周溝から北西へ溝がのびているが、古墳とは関係しない。

須恵器 (第200図, 図版146)

無蓋高杯(792)一点のみ図化しえた。口縁部、脚部は欠損している。体部に一条の波状文がめぐる。須恵器は、他に数点の破片がある。

埴輪 (第200図, 図版146)

円筒埴輪(793~802)のみが出土した。そのうち798~801は、胎土・焼成より同一個体と思われる(実測図は同じ段の部分を描いている可能性がある)。焼成は855のみ須恵質(焼成は土師質に近い)で、その他は全て土師質である。この古墳の埴輪も小破片で摩滅しているため調整は判別し難い。判断できるものでは795・800がヨコハケB類、796がタテハケである。内面は794がヨコハケ、798がナナメハケ、799がタテハケである、その他はナデである。また、802は線刻がみられる口縁部である。

第3節 遺構と遺物



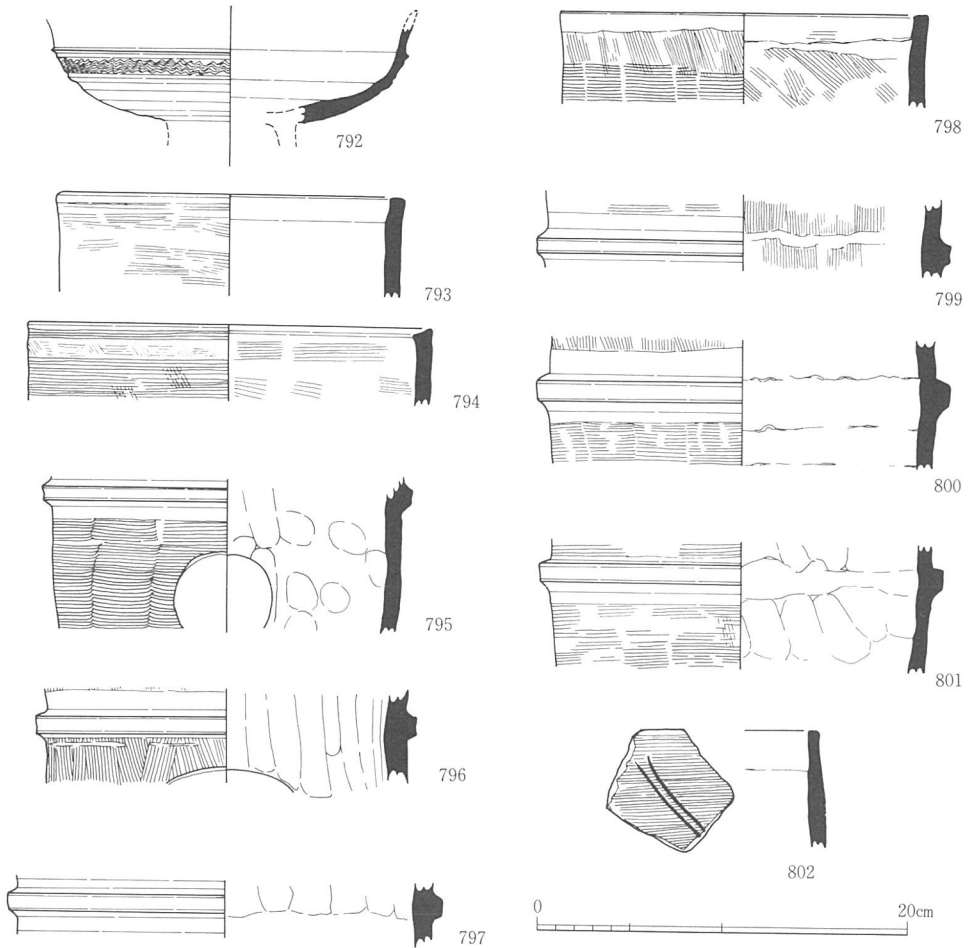
第199図 39-O G遺物出土状況図 (1/30)

第4項 古墳時代後期

土坑群1 (第201~204図・205図の803~847・206図, 図版70~73・147~151)

土坑群1は、C10 J HからR I付近に位置する。全長は35mにおよび、25基前後の土坑で構成され、大半が切り合っていると思われる。この遺構は、検出時点では切り合い関係が認められなかったため溝として掘削を行ったが、上層の埋土除去後に古墳時代後期に属する土坑群の平面プランを確認した。上層の埋土中からは中世の遺物や埴輪が出土しており、中世の時期ではまだ遺構が完全に埋まっていなかったことが窺える。土坑の埋土は遺構面のベース土と非常に酷似し、土坑掘削後すぐに埋め戻されていると考えられ、重複関係は明確には確認できなかった。

各土坑の平面形はまちまちであるが不整形をしたものが多いようである。また、遺構内の出土遺物は、須恵器の完形品、あるいはそれに近いものが多い。須恵器の出土状況を見てみると59-O Oのように数種類の器種が入れられたもの、60-O Oのように杯身、杯



第200図 39-O G出土遺物 (1/4)

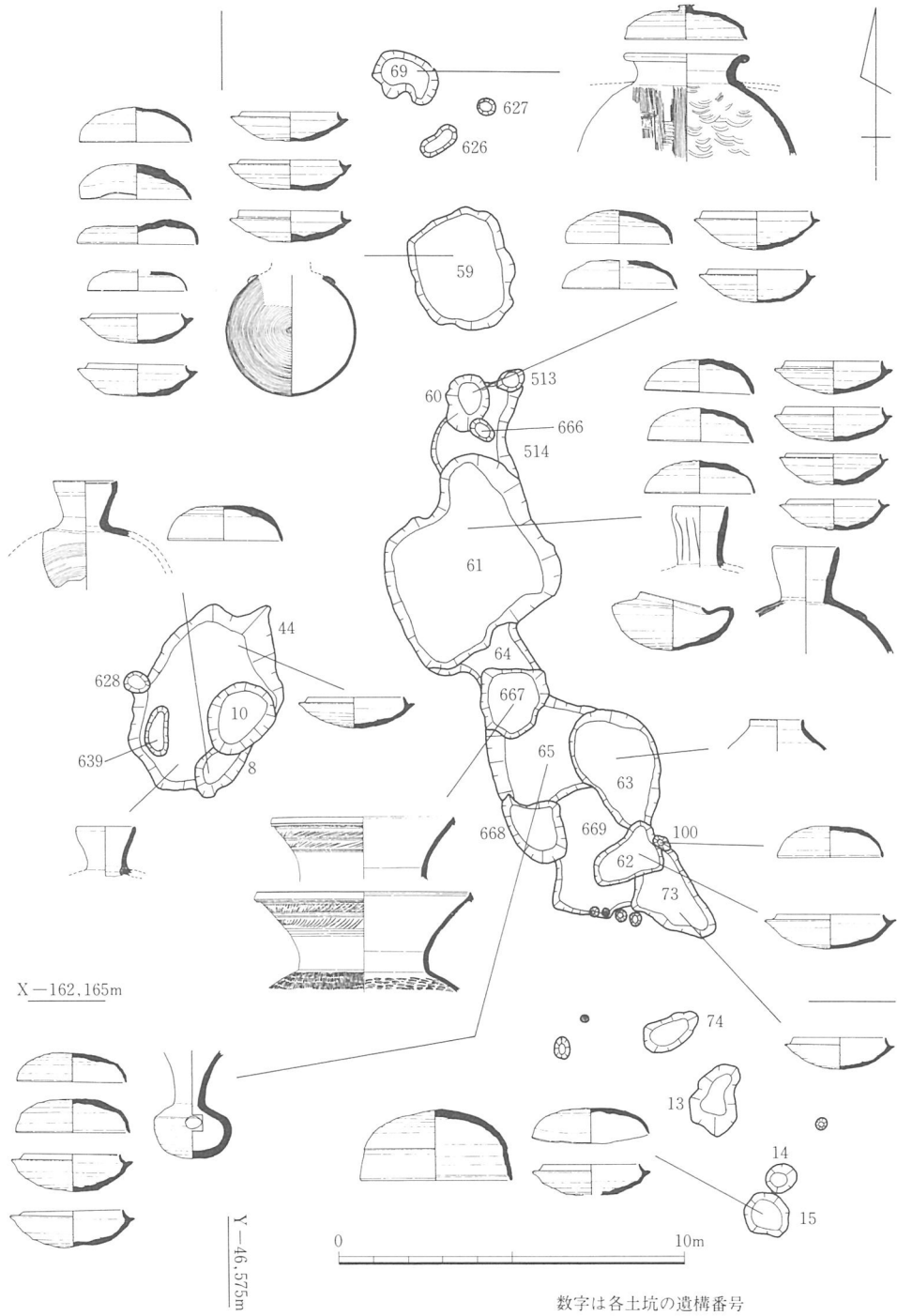
蓋が数個まとめて入れられたもの、100-00のように杯蓋が1個だけ入れられたもの、667-00のように甕の口縁部を2枚、底に置いた状態のものなどがみられる。遺構の性格としては、遺物の出土状況などから土墳墓の可能性も指摘できる。

遺物（第204・205図の803～847・206図，図版147～151）

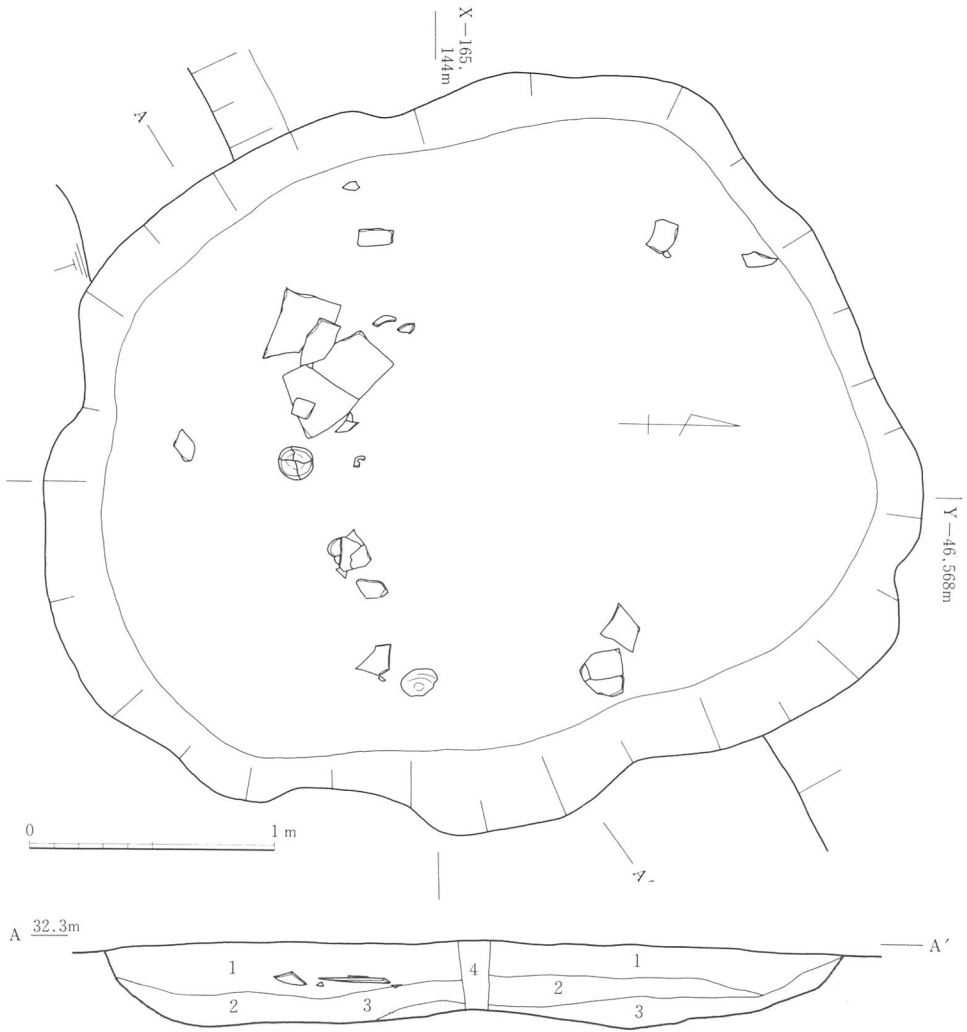
遺物は、先述の様に上層の中世の遺物を除くと土坑群に伴う遺物は須恵器のみである。以下、その須恵器についてのべる。

杯蓋（803～816）は、図化し得たもののうち14点を図示した。816にはつまみがつく。有蓋高杯の蓋であろう。口径は12～14cmで、器高は3.5～4.0cmであるが、一部806のような径の小さいものや809のような器高の低いものもある。ヘラケズリは体部の半ばくらい

第3節 遺構と遺物



第201図 土坑群1・2平面図(1/200)



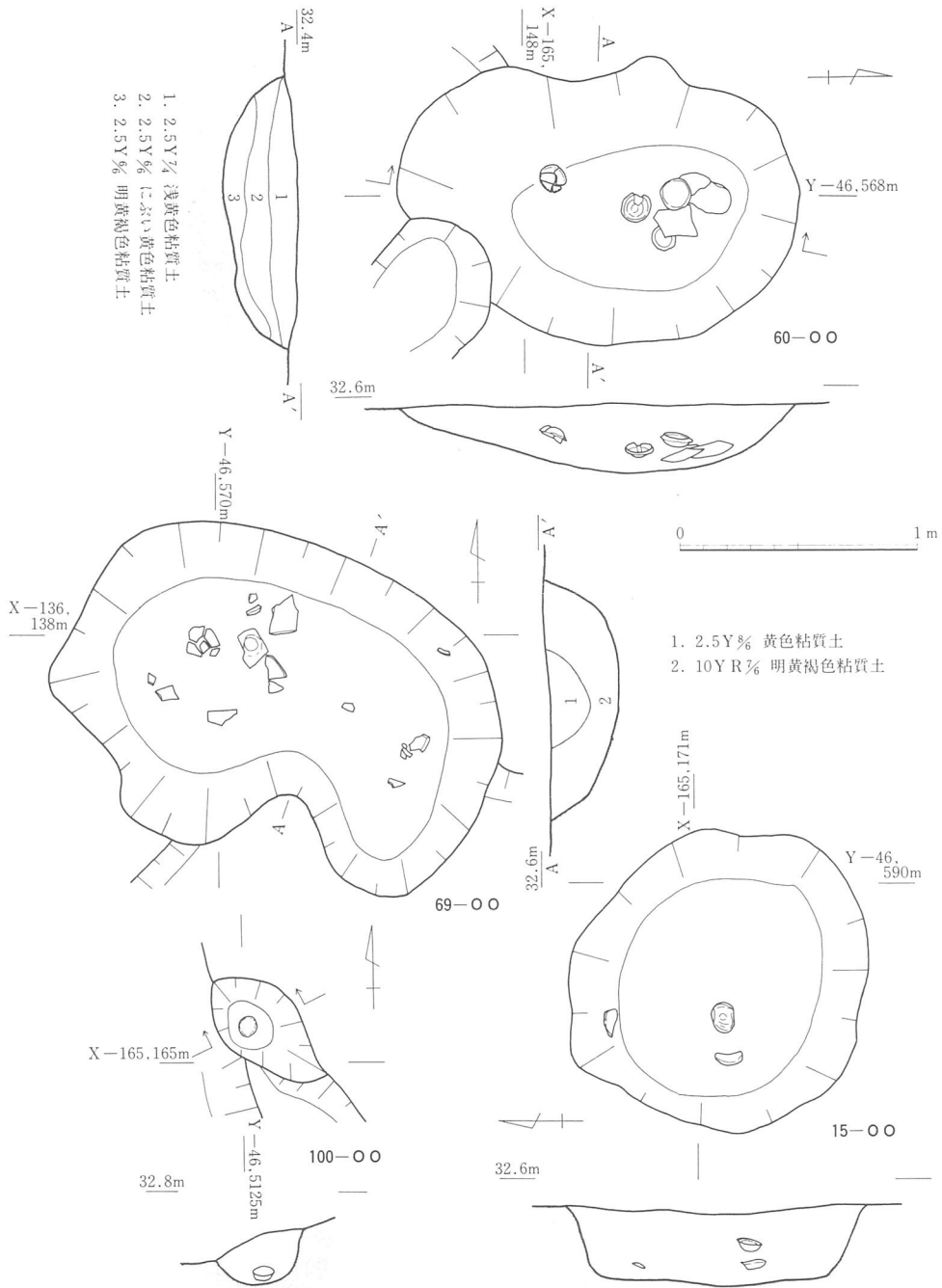
1. 2.5Y% に近い黄色粘質土 2. 10YR% に近い黄橙色粘質土 3. 2.5Y% 明黄褐色粘質土 4. 新しい杭痕

第202図 土坑群1 (59-00) 平面・断面図 (1/30)

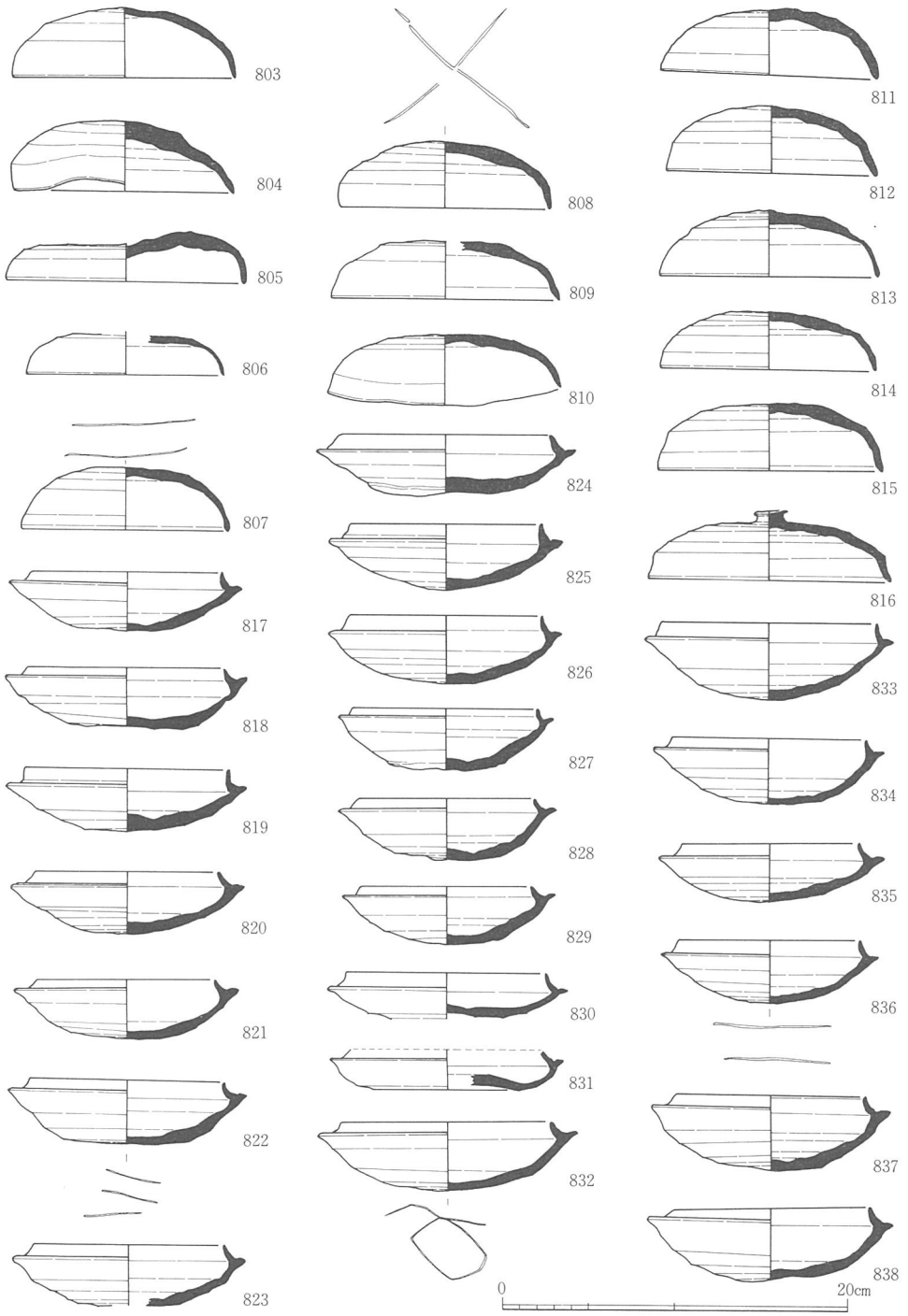
まで行っているが、806・809の2点はヘラケズリの範囲も狭い。808にはヘラ記号がみられる。

杯身(817~838)は出土点数が最も多く、うち21点を図示した。口径は10~12cm、器高は、3~4cmであるが、830や831の様に器高が2.5cmくらいのももある。ヘラケズリは杯蓋と同じく体部の半ばくらいまで行すが、830・831はヘラケズリの範囲が狭い。また、822・832・836には各々図示したようなヘラ記号がみられる。

第3節 遺構と遺物

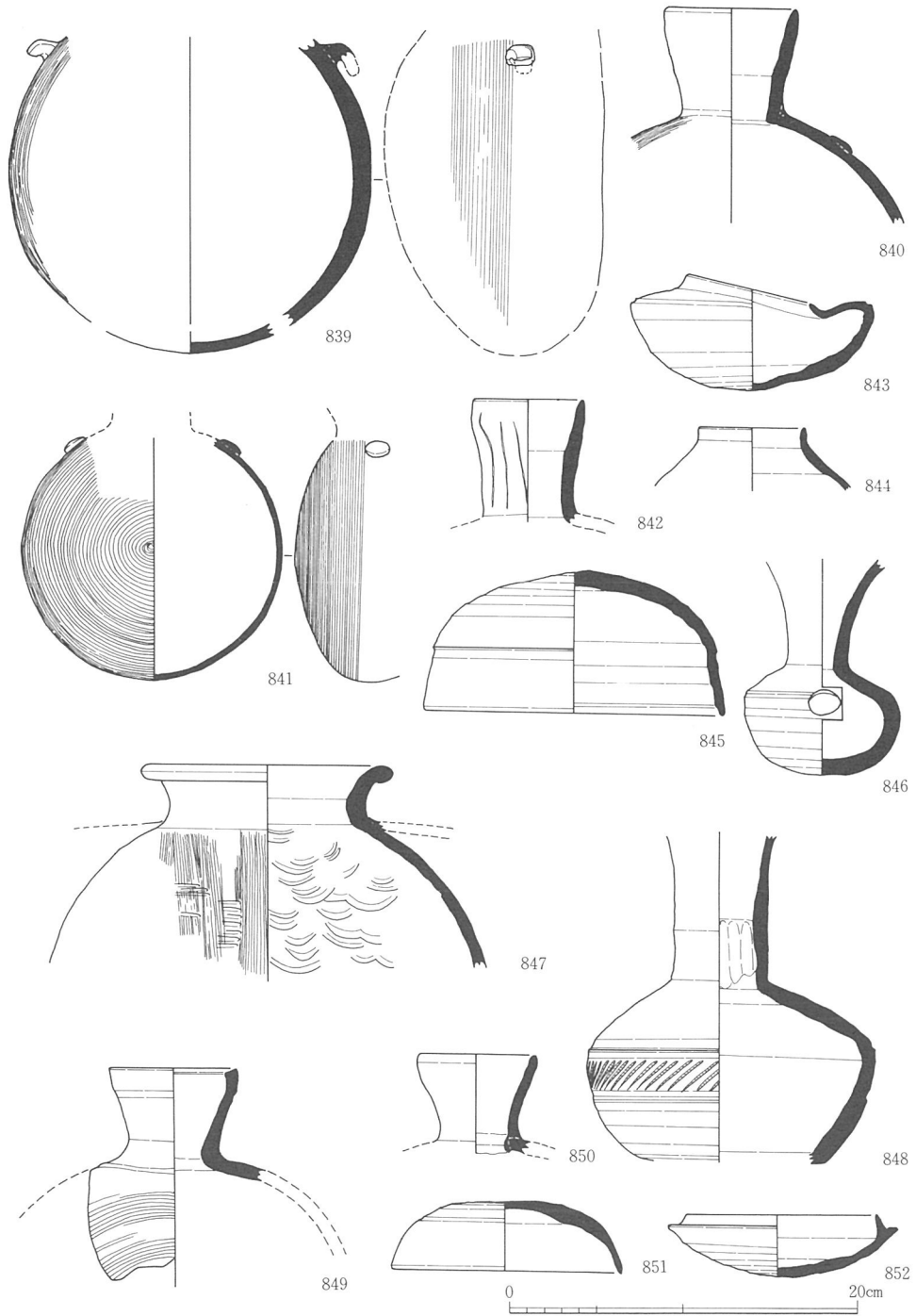


第203図 土坑群1 (15・60・69・100-00) 平面・断面図 (1/30)

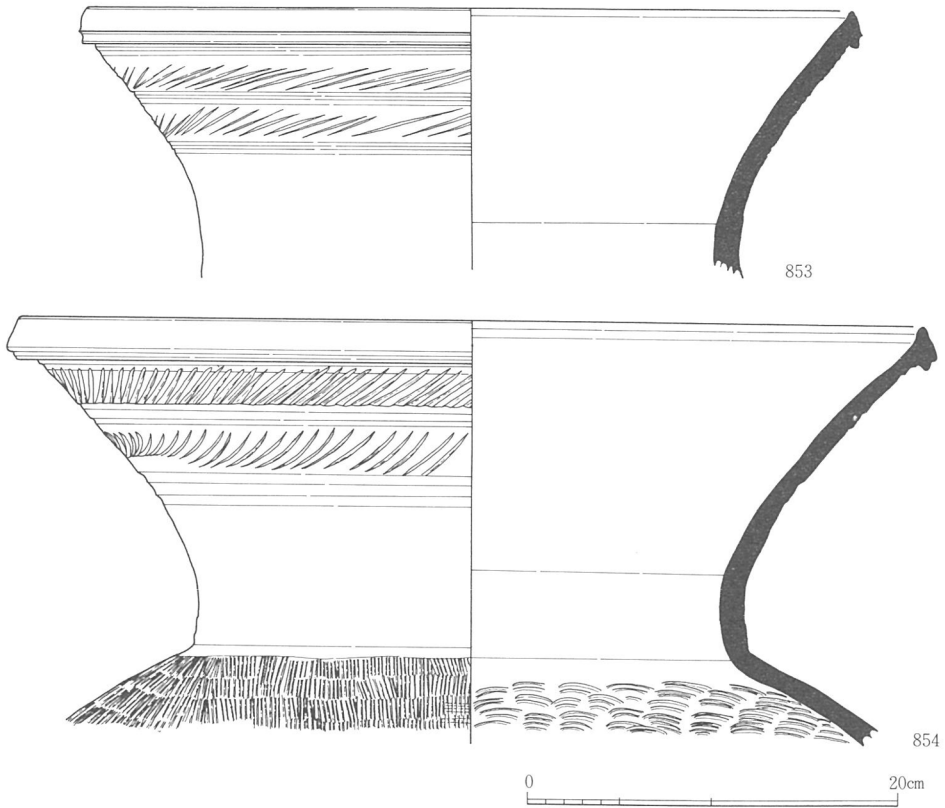


第204図 土坑群1 出土遺物1 (1/4)

第3節 遺構と遺物



第205図 土坑群1・2出土遺物(1/4)



第206図 土坑群1 出土遺物2 (1/4)

提瓶(839~841)は4点出土した。840・842は口縁部, 839・842は体部である。体部にはカキ目がみられ839の肩部には耳がつくが, 840・841は耳が退化し円形の扁平な粘土粒を貼付けている。842には自然釉がかり, ヘラ記号がみられる。

短頸壺(843・844)は2点ある。843は歪んでおり, 口縁部が傾いている。

蓋(845)は, 大型であり径は17.4cm, 器高8.2cmである。何の蓋かは明らかでない。甕(846)は頸部は長く外反するが, やや歪んでいる。口縁部は欠損している。

横瓶(847)は, 体部外面はタタキののちカキ目調整を行い, 内面には同心円のあて具痕が残る。

長頸瓶(848)は, 焼成があまく生焼けの状態である。体部には刺突文がめぐる。口縁部・高台は欠損している。

甕(853・854)は, 口縁部が2点あり, 径は各々42.4, 56.0cmである。854の方が外反度が大きい。2個体とも口縁部上半に二条の刺突文がめぐる。854は体部の一部が残り外

第3節 遺構と遺物

面にタタキを行う。内面には同心円のあて具痕が残る。

以上、土坑群1出土の須恵器について述べたが、数量的なものをみてもと甕が最も多く(31.4%)、続いて杯身が多い(29.1%)。そして杯蓋が続く(22.1%)。これをみると杯蓋と杯身のセットで半数以上を占める。これに甕が加わると80%以上を占めることになる。その他では、提瓶が多いほうである(6%)。逆に高杯が1点もみられないが、つまみの付いた蓋が1点みられるので高杯が存在した可能性もある。

土坑群2 (第201図・205図の849～852, 図版70・149～151)

土坑群2は、41-O Gに隣接するC10OG付近に位置し、長円形を呈する。規模は長径6.2m、短径3.9mであり、土坑群1と同じくいくつかの土坑が切り合って形成している。この遺構も上層からは中世の土が堆積しており、切り合い関係は検出面では確認できなかった。また、土坑群1よりも深く、底面で各々の土坑を確認したが、これも遺構の埋土と遺構面が同じような土で土坑掘削後すぐ埋め戻したような状況であった。このため各土坑の切り合いが不明確となったものもある。また、遺物も上層の中世のものを除くと須恵器のみである。

遺物 (第205図の849～852, 図版149～151)

出土遺物は土坑群1に比べると少ないが、出土状況は同じような様相を呈する。ここでは提瓶(849・850)、杯蓋(851)、杯身(852)を図示したが、他に甕が3点出土した。

第5項 室町時代

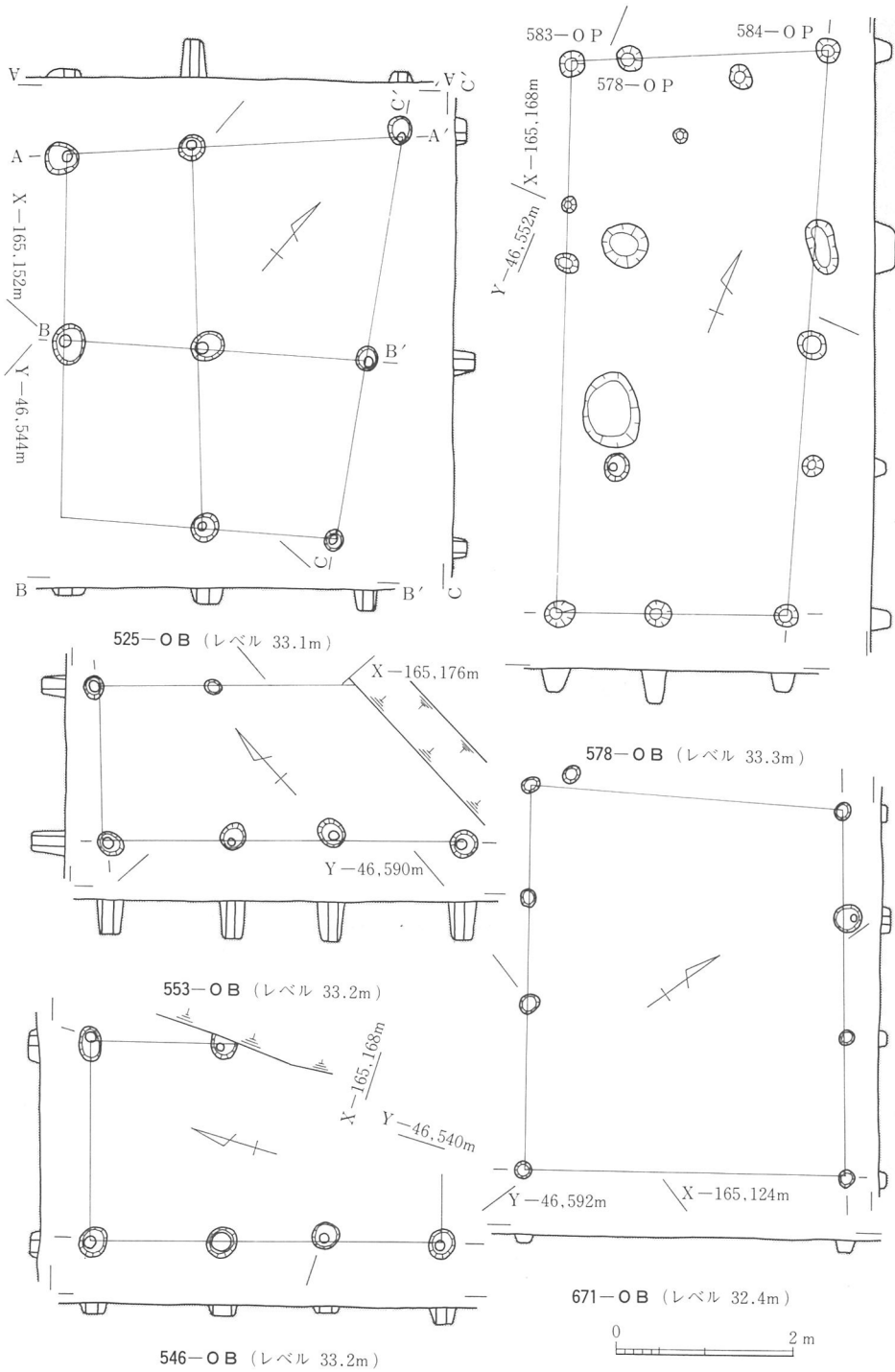
1. 掘立柱建物

671-O B (第207図, 図版75)

671-O Bは、C10FB付近に位置する。埋没谷を避けてすぐ北東側の平坦面に建てられている。4×1間の建物で、梁行がかなり長い。柱穴は円形で、掘方径は0.2mとかなり小さく、深さは0.1m程度の浅いものである。柱痕を識別できたのは一箇所のみであった。遺物は全く出土しなかった。

525-O B (第207図, 図版75)

525-O Bは、C10MO付近に位置する。検出した柱穴から判断すると、南隅の柱穴は確認できない。南隅に柱穴があったものと考え、2×2間の総柱の建物を想定できるが、北隅の柱穴の位置も不自然である。柱穴はいずれも円形で、柱痕も識別できているが



第207図 中世掘立柱建物平面・断面図 (1/80)

第3節 遺構と遺物

かなり小さく、深さもまちまちである。平面図の復元には形態に無理があり、北東辺を除いた形で再検討の余地があるかもしれない。遺物は出土しなかった。

546-O B (第207図, 図版74)

546-O Bは、C10KO付近に位置し、建物の一部は調査区外となっている。4×1間の建物で柱穴は円形である。この建物も削平のため柱穴の残りが悪く、かなり浅くなっている。遺物は出土しなかった。

553-O B (第207図, 図版74)

553-O Bは、C10SO付近に位置し、建物の東辺が調査区外となっている。よって、正確な規模は不明ながら、546-O Bと同様の4?×1間の細長い建物と思われる。また、この建物は、現地盤では546-O Bと同じ立地であるが、柱穴は深く残り、0.4mを測る。

578-O B (第207図・208図の855・857・858・859・860, 図版76・151)

578-O Bは、C10WM付近に位置する。この付近には多くの小穴が散在しており、穴の深さなども各々異なる。これらの穴を柱穴として建物を復元すると、図示したように考えられるが、確証はない。従って、柱列もきれいに対応しない。また、深さもまちまちである。ただ、この付近の小穴の集中具合から考えて、建物があったことはほぼ疑いないものである。この建物の柱穴からは、遺物が出土している。北西隅の柱穴(583-O P)から857・858が、その東隣の柱穴(578-O P)からは855が、北東隅の柱穴(584-O P)から860の土器が各々出土した。また、建物北側の582-O Pからも859の土器が出土した。855は瓦質の播鉢で外面はヘラケズリ、内面はハケ調整である。857・860は、瓦質の小皿で口径は10cm、底部はやや丸く未調整である。858・859は土師器の小皿で、口径は7.5cmと8.0cm、底は2点とも平らである。

2. 土坑

52-O O (付図3)

52-O Oは、C10VO付近に位置する。1辺5m、深さ0.3m程度の不整な方形を呈し、東側の一部は調査区外である。この遺構からは、図示していないが15世紀代の瓦質の羽釜や播鉢・平瓦、他に埴輪などが出土している。この土坑は、617-O Sを切っている。

53-O O (第210図・208図の863・209図の869, 図版152)

53-O Oは、52-O Oのすぐ西側のC10VO付近に位置し、長径3m、短径2.2m、深さ0.34mの不整円形の土坑である。埋土は十層に分層できる。遺物は瓦質の播鉢、瓦質甕(863)、瓦質羽釜(869)、備前焼、須恵器、埴輪などが出土した。863の口縁部は外反し

丸くおさめ、頸部内面が肥厚する。体部外面にタタキを行い、内面にはハケがみられる。869は口縁部がやや内傾し、外面に段をもつ。体部外面はケズリ、内面はナデである。

42-00（付図3，第208図の864・865・209図の874，図版152）

42-00は、C10UK他に位置する径6m、深さ0.3mの長円形の土坑であり、埋土は上下二層に分れる。一部肩の掘削に失敗した。遺物は瓦質の播鉢・羽釜・甕、備前焼、火舎、平瓦、須恵器、埴輪などが出土している。864は瓦質の甕である。口縁部は外反するが、863に比べ外反の度合いが小さくなっている。体部外面にはタタキを内面にはハケを施す。865は瓦質の火舎で、口縁部は内湾し外面にはスタンプで雷文を押す。874は瓦質の羽釜で、口縁端部は上面に平坦面をもち、口縁部外面に大きく二つの段をつけている。体部外面はヘラケズリ、内面はナデである。

47-00（付図3）

47-00は、C10VC付近に位置する長径10m、短径3.5m、深さ0.2mの長円形の土坑である。この遺構は、40-0Gの南辺周溝を切っている。今回検出した中世の土坑の中では最も平面規模が大きい。遺物は瓦質の播鉢・甕・羽釜、備前焼、須恵器、埴輪などが出土している。

49-00（付図3，第209図の871，図版152）

49-00は、C15CI付近に位置する長径4m、短径2.3m、深さ0.37mの長円形の土坑である。この遺構は50-00、51-00とも切り合っており、さらにこれらの遺構が39-0G東側周溝を切っている。これらの遺構の前後関係は、古いものから39-0G→50-00→49-00→51-00の順である。39-0G周溝は、49-0Gの南側で一部残っている。遺物は、羽釜の個体数が多いのが目立つ。他に、瓦質播鉢・甕、備前焼、萩焼、須恵器、埴輪などが出土している。871は瓦質の羽釜である。口縁部は短く二つの段をもつ。体部は外面にヘラケズリ、内面はハケのちナデを行なう。

71-00（付図3，図版77）

71-00は、C10TFに位置する径0.7m、深さ0.3mの円形の埋甕土坑である。この土坑内には土師質の甕が埋められており、水溜めに用いられたと考えられる。また、この遺構は、後世の井戸によって西側半分が破壊されており、土師質の甕もそれによって半分が欠損している。さらに口縁部も畑の開墾により破壊され欠損している。土師質の甕は口縁部が肥厚し、端部は平坦な面をもつ。体部は外面がタタキのち縦方向のハケ、内面が横方向のハケ調整を行う。16世紀代に属するものである。

第3節 遺構と遺物

3. 溝

72-O S (第210図・208図の862・866・867・209図の870・875, 図版152)

72-O Sは、C10 J JからC10 L F付近まで延びる全長20m、深さ0.42mの溝であり、埋土は基本的に三層に分層できる。この遺構は41-O Gの周溝と土坑群1を切っているが、41-O Gの周溝肩で不明瞭となり、少なくとも周溝内に72-O Sは認められなかったので、ちょうどこの付近で途切れたと思われる。遺物は瓦質播鉢・甕・羽釜、平瓦、埴輪などが出土した。870・875瓦質の羽釜である。870の口縁部は短く、875は長い。いずれも内傾するが、形態は異なる。外面はともにヘラケズリ、内面はナデを行なう。862は瓦質の甕である。口縁部は玉縁状を呈し、内面が肥厚する。866・867は円筒埴輪、共に焼成土師質で、最下段から二段分が残る。866は外面の最下段がタテハケ、下から二段目がタテハケのちヨコハケを行う。内面はナデである。基部は、外面に円周に沿ってケズリのような強いナデを行い、内面はユビオサエである。また、下から二段目には円形の透かしをあけている。867は外面が最下段が指あるいは工具によるナデ、下から二段目がヨコハケB類で調整を行なう。内面はナデである。これらは本来、41-O Gに伴うものである。

617-O S (付図3)

617-O Sは、C10 U Oに位置する長さ3.5m、幅0.5mの溝である。この遺構は、先述の52-O Oと切り合う。遺物は出土しなかった。

83-O S (第208図の856・209図の872・873, 図版76・151・152)

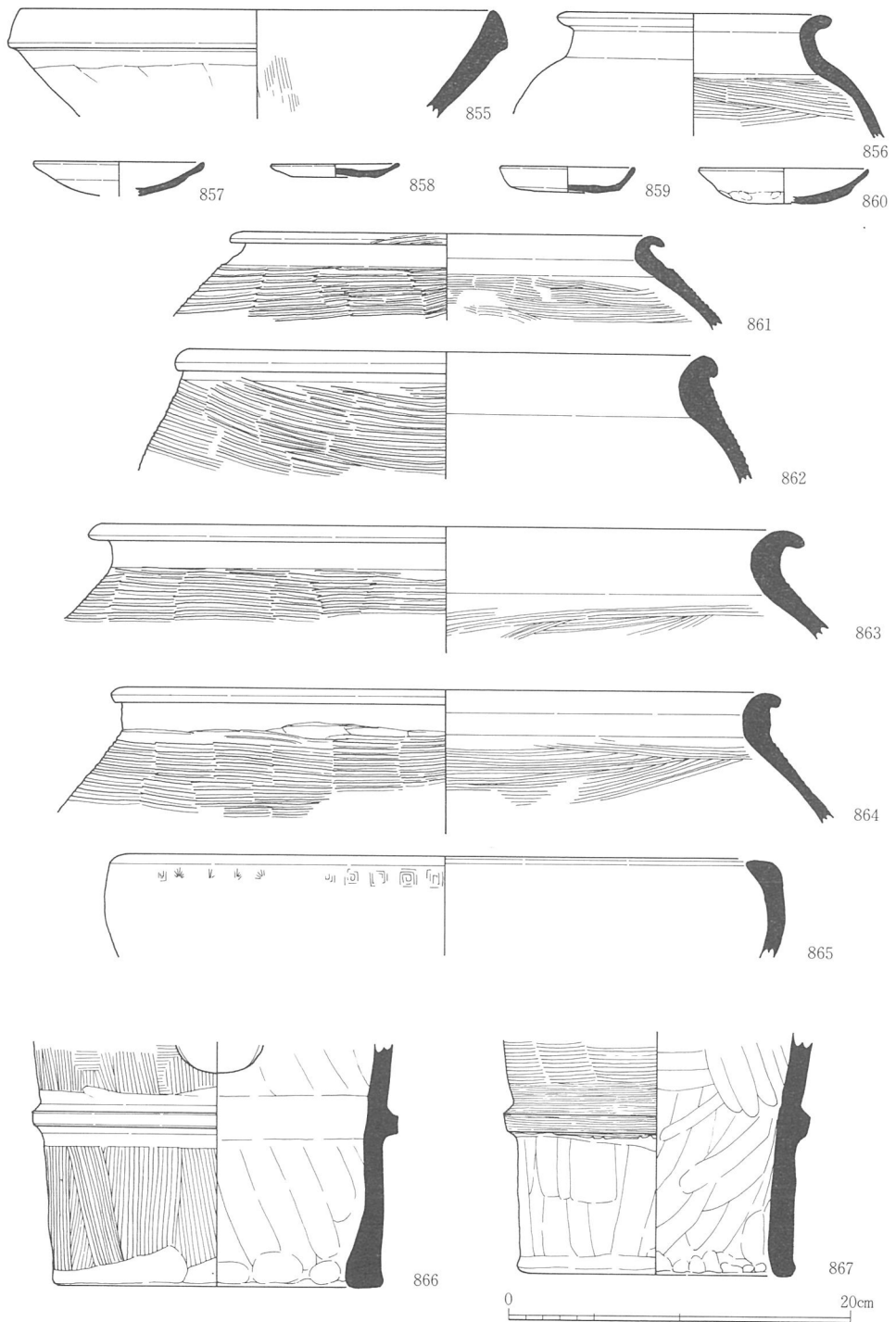
83-O Sは、C10 V J付近に位置する。全長10m、深さ0.26mの溝である。この溝は複雑な形をしており、中世の土坑ともつながっている。遺物は、瓦質播鉢・甕・羽釜、平瓦、須恵器、埴輪などが出土している。872・873は瓦質の羽釜である。口縁部は内傾し、段をもつ。外面はヘラケズリ、内面はハケのちナデである。856は須恵質の甕である。この土器は、次に述べる76-O Sから出土した破片と接合した。口縁部は丸くおさまり、外面は回転ナデ、内面はハケが残る。

76-O S (付図3, 第208図の856, 図版151)

76-O Sは、C10 V I付近に位置する長さ6m、幅0.7m、深さ0.12mの浅い溝である。遺物は瓦質の羽釜・播鉢、備前焼、須恵質甕(856)がある。

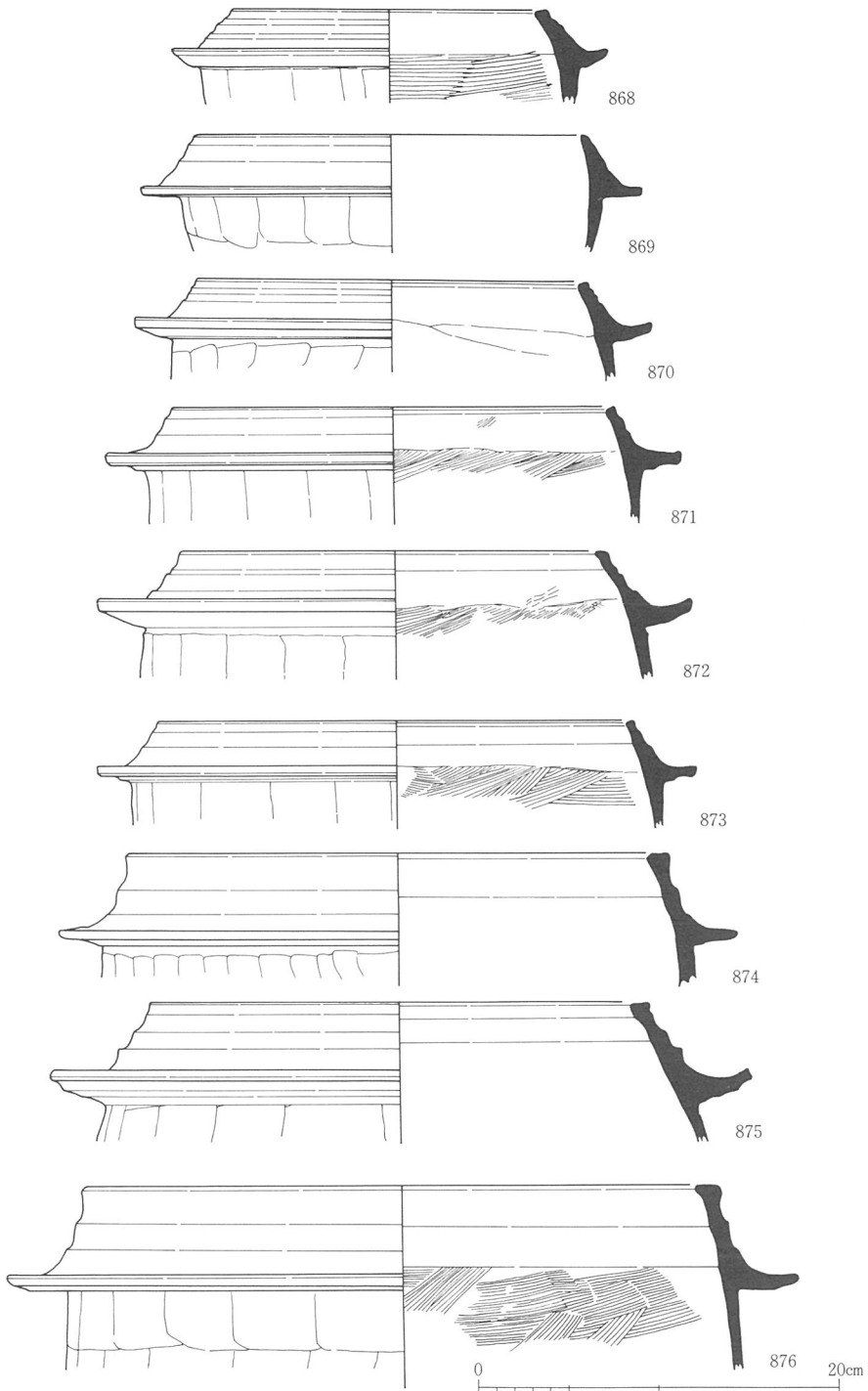
748-O S (付図3, 第209図の868, 図版152)

748-O Sは、C09 W X付近に位置する長さ10.8m以上、幅1.4m、深さ0.35mの溝である。この溝は、調査区南西隅の谷地形上に位置しており、谷を横切る形で斜面下の方へ流



第208図 中世遺構出土遺物 1 (1/4)

第3節 遺構と遺物



第209図 中世遺構出土遺物 2 (1/4)